

- 1 . 主はモーセに告げて仰せられた。
- 2 . 「アロンに告げて言え。
あなたがともしび皿を上げるときは、七つのともしび皿が燭台の前を照らすようにしなさい。」
- 3 . アロンはそうにした。
主がモーセに命じられたとおりに、前に向けて燭台のともしび皿を、取りつけた。
- 4 . 燭台の作り方は次のとおりであった。
それは金の打ち物で、その台座から花卉に至るまで打ち物であった。
主がモーセに示された型のとおり、この燭台は作られていた。
- 5 . ついで主はモーセに告げて仰せられた。
- 6 . 「レビ人をイスラエル人の中から取って、彼らをきよめよ。
- 7 . あなたは次のようにして彼らをきよめなければならない。
罪のきよめの水を彼らに振りかける。
彼らは全身にかみそりを当て、その衣服を洗い、身をきよめ、
- 8 . 若い雄牛と油を混ぜた小麦粉の穀物のささげ物を取る。
あなたも別の若い雄牛を罪のためのいけにえとして取らなければならない。
- 9 . あなたはレビ人を会見の天幕の前に近づかせ、イスラエル人の全会衆を集め、
- 10 . レビ人を主の前に進ませる。
イスラエル人はその手をレビ人の上に置く。
- 11 . アロンはレビ人を、イスラエル人からの奉獻物として主の前にささげる。
これは彼らが主の奉仕をするためである。
- 12 . レビ人は、その手を雄牛の頭の上に置き、
レビ人の罪を贖うために、一頭を罪のためのいけにえとし、一頭を全焼のいけにえとして主にささげなければならない。
- 13 . あなたはレビ人をアロンとその子らの前に立たせ、彼らを奉獻物として主にささげる。
- 14 . あなたがレビ人をイスラエル人のうちから分けるなら、レビ人はわたしのものとなる。
- 15 . こうして後、レビ人は会見の天幕の奉仕をすることができる。
あなたは彼らをきよめ、彼らを奉獻物としてささげなければならない。
- 16 . 彼らはイスラエル人のうちから正式にわたしのものとなったからである。
すべてのイスラエル人のうちで、最初に生まれた初子の代わりに、わたしは彼らをわたしのものとして取ったのである。
- 17 . イスラエル人のうちでは、人でも家畜でも、すべての初子はわたしのものだからである。
エジプトの地で、わたしがすべての初子を打ち殺した日に、わたしは彼らを聖別してわたしのものとした。
- 18 . わたしはイスラエル人のうちのすべての初子の代わりにレビ人を取った。
- 19 . わたしはイスラエル人のうちからレビ人をアロンとその子らに正式にあてがい、
会見の天幕でイスラエル人の奉仕をし、イスラエル人のために贖いをするようにした。
それは、イスラエル人が聖所に近づいて、彼らにわざわざ及ぶことのないためである。」
- 20 . モーセとアロンとイスラエル人の全会衆は、
すべて主がレビ人についてモーセに命じられたところに従って、レビ人に対して行なった。
イスラエル人はそのとおりに彼らに行なった。
- 21 . レビ人は罪の身をきよめ、その衣服を洗った。

そうしてアロンは彼らを奉獻物として主の前にささげた。

またアロンは彼らの贖いをし、彼らをきよめた。

22. こうして後、レビ人は会見の天幕にはいて、アロンとその子らの前で自分たちの奉仕をした。

人々は主がレビ人についてモーセに命じられたとおり、レビ人に行なった。

23. ついで主はモーセに告げて仰せられた。

24. 「これはレビ人に関することである。

二十五歳以上の者は会見の天幕の奉仕の務めを果たさなければならない。

25. しかし、五十歳からは奉仕の務めから退き、もう奉仕してはならない。

26. その人はただ、会見の天幕で、自分の同族の者が任務を果たすのを助けることはできるが、自分で奉仕をしてはならない。

あなたは、レビ人に、彼らの任務に関して、このようにしなければならない。」

説教

民数記8章はおもにレビ人の任職の様子を記録したものです。

その前に、聖所の中の燭台についての神さまの教えが記録されています(8:1-4)。燭台は幕屋の二つの部屋のうち入って最初の部屋である聖所を照らす道具です。この燭台についての教えはその前の7章と密接に関連しています。6章の終わりに祝祷の記録があり、祝福の具体的な仲介道具となる幕屋と祭壇の聖別がなされて現実に機能していくようになると、幕屋の奥の部屋である至聖所の契約の箱の上から神さまがモーセに語り始めるようになります(7:89)。こうして、幕屋を通して神さまはイスラエルにご自身の栄光をあらわし始めるのです。そして、これに続く8章の初めでは、神さまがそこに臨在してご自身の栄光をあらわされることを示すために、幕屋の聖所に燭台を置いて聖所の中を照らすよう命じられます。燭台は純金製で、七つの枝があり、花が咲いている形で先端に「ともしび皿」を乗せます。「七つのともしび皿が燭台の前を照ら」したため、聖所の内部は燭台の色を反映して金色に輝きました。そして、その光は供えのパンをも照らしました。合計十二個が六つずつ二つに分けて積み重ねられたパンは十二部族を象徴します(レビ` 24:5-9)。火と光はいのちに満ちた神さまの臨在と祝福を象徴します。こうして、イスラエル十二部族全員が神さまの臨在の中を生きているという事実を幕屋の中で視覚的に表現したのでした。

しかし、実際に幕屋が機能して、現実にイスラエルの人々に神さまの臨在の栄光と恵みをあらわしていくには、模型だけではどうしようもありません。幕屋で奉仕する人材が必要です。幕屋を機能させていくのは「物」ではなく「人間」です。そこで奉仕する人材があってこそ幕屋は実際に神の栄光をあらわすようになるのです。それで、5節以降では幕屋の奉仕に関わるレビ人の任職が教えられます。既に3章で人口調査がなされ、4章で役割が教えられたレビ人でしたが、8章の任職をもって命じられた奉仕に励んでいくこととなります。任職の最初の儀式は、「罪のきよめの水を彼らに振りかける」ことです(7)。祭司の任職の場合には、いけにえをささげ、油と血を注がれ、祭司の服を着ることによって特別に神の栄光をあらわす者へと高められました。これに対し、レビ人は単にきよめられるだけでした。まず「罪のきよめの水」をふりかけます。そして、「全身にかみそりを当て」て、「衣服を洗い、身をきよめ」ます(7)。エジプトの祭司たちも三日にわたり全身の毛を剃り落として衣服を洗いましたが、その理由は「神に仕えるときに一匹の虱も、その他どんな汚れもつかないようにする」ためでした。「罪のきよめの水」と全身の剃毛によってきよめた身体の上に清潔な衣服を纏うことによって、レビ人は言わば新しい人間に生まれ変わったのです。そうして後に、レビ人は按手の儀式をもって任職されることとなります。その際、モーセはレビ人を会見の天幕の前に近づかせ、イスラエルの全会衆を集めます(9)。そして、彼らが「その手をレビ人の上に置」いて按手します(10)。ささげ物への按手は、全焼のいけにえ、和解のいけにえ、罪のためのいけにえの儀式などの際になされました。レビ人は、全イスラエルの身代わり・代償となって、生きたいけにえとして神さまにささげられるのです。それから、「アロンはレビ人を、イスラエル人からの奉獻物として主の前にささげ」ます(11)。「奉獻物 hp'WnT。」は「揺祭」とも訳され、文字通り「水平方向に揺り動かすいけにえ」を意味します。例えば、「和解のいけにえ」の際にいけにえを揺り動かすことが命じられます(出ヱ`プト29章、比` 3章)。神さまが最も最上の部分を食べ、残りの肉を人々が食べて、神と人とが共に和やか

に食事をするのが「和解のいけにえ」ですが、その際「(主に向かって)揺り動かす」(出エジプト 29:24,26)のは、ささげ物を「神さまに捧げ、下賜される」という神さまとの親しい交わりをあらわしました。ちょうどそのように、アロンはレビ人を主に向かって水平に「揺り動か」して「主の前にささげ」ます。つまり、アロンは、全イスラエルの代表あるいは身代わりであるレビ人を生きたいいけにえとして神さまにささげるのですが、しかし、だからと言って、レビ人は屠られ殺されて煙と化して天の神さまのもとに立ち上って行くのかと言えばそうではありません。いわばいったん神さまに捧げられて殺された後に、再び復活して神さまのもとから全イスラエルのもとへと戻されるのです。それで、二頭の雄牛をいけにえとして神さまにささげます。一頭は「罪のためのいけにえ」として、もう一頭は「全焼のいけにえ」として主にささげます(12)。つまり、「レビ人の罪を贖うために」「罪のためのいけにえ」をささげ、さらには「全焼のいけにえ」を主にささげて、罪のさばきを受けて死ぬべきところを身代わりのいけにえによって救われた自分自身の全生涯を神さまにささげて生きることを告白するのです。こうして、一度神さまにささげられて殺された後に復活した者として、自分の欲を追求するためではなく、この世の働きをするのではなく、レビ人はただ「主の奉仕をするため」に生きようになります(11)。神と人の間を行ったり来たりしながら「主の奉仕」をします。具体的には、レビ人は、「アロンとその子らに正式にあてが」われて祭司の働きを補佐しました(19)。ここの直訳は「わたしは『与えられた者』としてアロンとその子らにレビ人を与える」です。祭司アロンは一週間の聖別の儀式を経て神さまの働きのために「引き渡された者」となりましたが、彼を補佐するレビ人もまた同じくアロンに完全に「引き渡された者」となって専ら神と人のために奉仕しました。

神さまはこのようなレビ人のことを「最初に生まれた初子の代わり」と呼びます(16)。実際の初子はルベン族ですが、神さまはその代わりにレビ人を初子とすると宣言なさいました(3:12)。すべて最初に生まれた初子は神さまのものです。奴隷であったイスラエルの所有権を主張して譲らないエジプトの王パロに対し、神さまは、エジプト全土の初子を殺すことでイスラエルはおろかエジプト全土でさえ神さまの所有に属することを最も強烈に啓示なさいました(17)。この時、エジプトの全家は「初子」を殺されて悲しみ嘆きました。一方のイスラエルは、「初子」の身代わりとして殺された傷なき小羊によって救われます。それで、救われた喜びと感謝をもって「初子」や「地の十分の一」を献げて生きました。自分たちの存在と所有物一切が神さまのものであることを認め、神さまの民であることを喜び感謝しつつ、「初子」と「地の十分の一」を献げました。「初子」を献げる行為は、自分が神のものであることを告白する行為です。つまり、レビ人を「初子」とすると言う神さまは、レビ人を初めイスラエル全部族が神さまのものであり、全部族が神さまの働きを担う者とされたことを宣言しておられるのです。こうして、レビ人は、全イスラエルの身代わりとなり、イスラエルの代表として、イスラエルに先駆けて、幕屋で「主の奉仕をする」こととなります(11,15,19,22)。レビ人が祭司の補助として幕屋で奉仕することによって幕屋は本格的に機能し始めます。そして、神の臨在を顕す聖なる場所となるのです。そこで神と人とが交流します。神のことばが語られ、人の罪が贖われます。幕屋が全イスラエルに神の栄光を力強くあらわして、罪に死せる人々にいのちがもたらされていきます。

これもすべて幕屋での奉仕者があってのことです。ただ単に幕屋だけが存在しても、それだけではイスラエルに神の栄光はあらわれません。幕屋を運ぶ者がいて、それを組み立てる者がいて、そこで燭台に明かりを灯す者や、いけにえを屠る者がいなければ、人々の罪は贖われません。つまり、幕屋の奉仕者がいなければ幕屋は機能しないのです。機能しないということは、人々の罪は贖われることなく、全イスラエルは罪と死と滅びの中にあることとなります。幕屋はイスラエルにとって絶対必要不可欠なものです。これが無ければ死ぬ以外にないという、イスラエルのいのちと言うべきものです。幕屋は、人々に神さまの祝福といのちをもたらし最も大切なものです。でも、だからといって、そんなに良いものであるのだからということで、誰でも奉仕できるのかと言えばそうではありませんでした。ヘタに関わると、アロンの子であっても、ナダブとアピフのように神さまに打たれて殺されてしまいます(レ10:1-2)。幕屋の奉仕者は、細心の注意を払い、全神経を集中させて、全身全霊挙げて、イスラエル全部族の中で最も忠実に主のみことばに従うものでなければなりません。そして、この奉仕は片手間ではできないものではなく、この特別な奉仕へと特別に召されたレビ人だけが、神さまに自分の全生涯をささげ、献身して全うしていくべきものでした。レビ人は他の部族よりもマシな部族だったからこの働きに召されたわけではありませんが、神さまに名指しで召された以上は、自分の現実がどんなに罪深くて、召しに答えて精一杯奉仕していかねばなりません。こうして、神への献身者であるレビ人は、最も忠実に奉仕して、全イスラエルに災いが及ぶことがないようにし、人々にいのちと祝福をもたらしたのです。全イスラエルは、レビ人の奉仕を通して神のさばきを免れました。そして、神の栄光を見て、神のいのちを祝福にあずかりました。レビ人は、人々に救いの恵みをもたらすという意味では、生ける神の小

羊キリストの型です。そして、祭司を補助するという意味では、教会の役員に似たものと言えます。神さまはこういうレビ人という献身者をイスラエルに特別に置かれました。それで、イスラエルは、レビ人という献身者を見ながら、生ける神の小羊のいけにえによって救われたことを思い出して感謝しました。そして、レビ人の実際の奉仕を通して神さまの恵みにあずかり感謝しました。こうして、さらには、自分たちも、レビ人のように、時にはナジル人になりながら、神さまの恵みにより救われ生かされているこの身を捧げて神と人に仕えて、神の栄光をあらわしました。神への献身者を目指して生きるよう努力したのです。